

北大東島 熱帯植物から化粧品・衣服原料

「月桃」1次加工施設が完成



茎からは繊維を抽出する(北大東村に完成した新施設)

沖縄本島から東に約360キロに位置する北大東島で熱帯植物「月桃」の1次加工施設が完成した。葉や茎から精油や繊維を抽出、化粧品や衣服の原料として県内外の企業に本格販売する。従来は月桃をそのまま船で本島に輸送してきたが、1次加工すれば飛行機を利用できるため輸送コストや配送日数が削減できる。安定供給を通じ特産品の月桃をブランド化し新たな産業に育てる。

本島に空輸 村、来月から運営

北大東村が4月1日から運営を始める。投資額は2億8千万円。国から8割、県から1割の補助を受け3年かけ整備してきた。敷地面積は450平方メートルで最新鋭の加工設備を導入、年間処理能力は240トンの上。同施設ではまず農家から調達した月桃を葉と茎部分に分けて仕分けする。葉は細かく裁断し水蒸気蒸留装置を使い精油を抽出し、出荷までは冷蔵冷凍庫に保管。茎からは解繊機で繊維を取り出す。抽出した精油や繊維は化粧品メーカーのバイオ21(沖縄県うるま市)やクラボウなど県内外の企業に販売していく。同村はここで得た収益を農家に配分しながら3〜5年後の黒字化を目指す。従来は注文があった場合に葉や茎をそのまま船

で出荷していた。ただ、生の葉は保存のため冷蔵コンテナに入れて運送しコストがかかる。また、船は5日に1往復の運航に限られるうえ、台風などで急ぎスケジュールが変更する場合もあり安定供給が難しかった。

工することで大きさや重量が小さくなり那覇と北大東島を結ぶ小型飛行機で運送できる。同村経済課の大城勝彦係長は「輸送コストは従来半分以上、1週間以上要していた本土への出荷日数も2日程に短縮できる」と話す。また1次加工する

ば付加価値も高まる。北大東島では主にサトウキビとカボチャ、ジャガイモを栽培しているが、いずれも収穫は1〜3月に限られる。月桃は通年で収穫できるため、本格出荷が始まれば農家の安定経営につながる。

北大東島の月桃は大輪月桃と呼ばれ葉が大きいのが特徴だ。ポリフェノールを豊富に含んでおり化粧品や茶など多様な商品に活用されている。同村はこれを機に1次原料を本格出荷、地域経済の起爆剤にしたい考えだ。